

耳言葉 乳幼児が遊ぶときに言う唱え言葉と子守うたの四種がある。唱え言葉の中には、遊ぶ動作をつけるものと、唱えるだけで遊びになるものがある。動作をつけるものは子供の遊びの項で述べることにして、ここでは唱えるだけで遊びになるものについて述べる。

1 口言葉

○家族の呼び方

父(チャー・チャン) 母(アンマ) 兄(ニイーニイー) 姉(ネンネ) 祖父(チーヂ) 祖母(バーバ)

○家畜にいう幼児語は、主にその鳴き声をまねた声語が用いられている。

成牛(ムーム) 子牛(メーメ) 馬(ヒンヒン) 豚(クルクルまたはウワーウワー) 犬(ワンワン) 山羊(メーメ) 猫(ミヤミヤ) 鶏(トウトウイ) ひよこ(ピヨピヨ)

○飲食物

水(プーブ) 飯(メーメ・マンマ) 唐辛(アーム) 魚(イユウイユウ・ウーウ) 砂糖(ター) 野菜類(ジュージュ) みかん(クーク) お菓子(クワーシ) お粥(ケメ)

○幼児自身の動作

四 子供時代

(一) 子供と言葉

呱呱ニニの声をあげて、この世に生を受けた新生児はすべてが新しい門出である。そして乳児期の一年間で身近な人たちから赤ちゃん言葉、赤ちゃんしぐさを学びとるのである。

乳幼児言葉は、自身の口から出す言葉、大人が言つて聞かせるだけで、必ず乳幼児の口から言わなくてもよい

四つんばいにはうこと(ハイハイ) 立つこと(タッタ・ターチ) 座ること(キーチャ) 歩くこと(アーチアーチ) 寝ること(ミーミ) 抱くこと(ダーチ) 背負うこと(チャツチャ) 肩車や馬に乗ること(カイカイ) 浴びること(ジャブジャブ) 物をしまうこと(ナイナイ) 物のなくなつたこと(パー)

○その他の幼児語

赤ちゃん(ボーボ) 女のチンチン(ヤーヤー) 男の子のチンチン(チンチン) はれ物や傷などの痛いところ(カーカ) 熱い(アーチチ) 乳(チーチー) おしっこ(シーシー) うんこ(ニヤーニヤー) きたないこと(ティヤー) 手(ディーティ) 月(トートウハイ) 雷(ゴロゴロ) 火(フーフ) 船(プー) 着物(ジージ) きれいな着物(チャージージ)

2 耳言葉(赤ちゃんのあやし方と動作)

かわいい子(ハナシグワー) きれいな子(チュラグワー) 赤ちゃんが生後二か月ころから笑い始めるのを(ワレハジメタン) といい、母親は抱きしめて「ハナシグワー」「チュラグワー」を繰り返しながらほおずりする。またなだめすかすときにも以上の言葉を唱えてあやす。

○イング

生後二か月ころの赤ちゃんを抱きあげて顔を見つめながら、イング、イング、を繰り返し呼びかけると、笑顔でじつと口もとを見つめているが、だんだんあごを上げて、グー、グー、と笑顔でこたえはじめ、だんだんじょうずになる。

○ガツチョン(額どうしのゴツン)

赤ちゃんが生後五、六か月になりお座りができると、赤ちゃんの額に自分の額を軽くコツンと当ててガツチョンと唱える。

○ターチターチ・アーチアーチ

立ち始めたらターチターチと立ち方の練習をさせ、歩き始めたならアーチアーチと歩く練習をさせる。

○バアーバアー

口をあけて、広げた手をあてながら、バアーバアーと声を出して喜ぶ。

○カンブイカンブイ 頭を左右にふる。

○アーヤアヤ 拍手・両手をたたく

○ニンギニンギ にぎって開いてをくりかえす

○オツムテンテン 頭を軽く手でたたく

○チューイ、バー 両手で顔をどじ、手をはなす
○ウランド、ウランド いないないと、かくれんぼのまねをする。大人が両手で自分の顔をかくして「チューイ」といい、次に手を離して「バー」と顔を出す。

○クイカ、クイカ
おもちゃや花などを与えるとき、大人がクイカ、クイカと唱えながら見せびらかし、子供が手を出したときにわたしてやる。

○ファートウヌトウダーン
子供が道を歩いていて倒れ、泣くかまたはべそをかくときに、ファートウヌトウダーン（鳥が飛んだ）フウドウイヌトウダーン（大きな鳥が飛んだ）といいながら子供を抱きおこす。子供はほんとうに鳥が飛んだと思ひその鳥の行方を追って泣き止んだものと思われる。

3 なぞなぞ（アーシムンガタイ）

なぞなぞにはアーシムンガタイという。家庭内では夕食をすませた後で、父または年長者がなぞをかけ、子供たちが考えて答える。なぞなぞには昔から伝来のものもあれば、即座に作ったものもある。

なぞのねたは自然物・農作物・家畜などだれも見た

（ウラワ、アマカラ、モータイ、フー、ワヌハ、マーカー、モータイイカー、オーテイカラ、ハナシヤシラーヤ）
答ーしごきおび

○石の穴にいる美しい姉さんはだれだろうか。

（イシヌミーヌ、チュラアヤ、ヌーガ）答ーとかげ

○畑の巡査は何だろうか。

（ハルヌ ジュンサ、ヌーガ）答（フキまたはキジグシ）
作物を植えてある畑に入らないようにと目じるしに立ててある竹または木や蘇鉄そてつの葉

○歩いてても歩いてても歩きつけない道はどんな道だろう。

（アチム アチム アチキヤラヌミチ ヌーガ）
答（クルマンド）昔黒砂糖作りのきびしぼりをしたとき、牛がブイ（車を回す横棒）を引いて、ぐるぐる回った道。

○骨はなくて色の白いきれいな人は何だろうか。

（フニハ ナーヌ イルシュウサヌ チュラチューヌーガ）答ーとつら

○長い畑・まるい畑・都の花は何だろうか。

（ナガバツテ、マルバツテ、ヤマトウヌハナ、ヌーガ）
答ー海・空・お月様

○葉は使われて、幹は糸になるのは何だろうか。

り聞いたりしているものである。月の夜などいつもの遊び場所（アシビドー）で、なぞをかけたたり、答えたりして遊んだものである。

○赤ふるしきをかぶって家の戸口に立つものは何か。
（アアーフルシキハブテイ、ヤーヌイジグチニタチュシ、ヌーガ）答ー鶏

赤ふるしきは鶏のとさかをさす。放ち飼いをしていたこの鶏はよく戸口に立つて家の中を見守り、飼い主がえさをくれるのを待ったからである。

○打たない太鼓が鳴るのは何か。

（ウタヌチヂンヌ、ナユシヌーガ）答ー宙

○石の穴にかくれていて人間の蓄えたものを食べるのは何か。

（イシヌゴーニ、ハクリトウテ、チューヌ、ハジミテイ アヌムン、カミシ、ヌーガ）答ーねずみ

○伏してポンポン、起きて一杯になるものは何か。

（ウチンチ、ポンポン、ウイテイ、チュハラ、ヌーガ）
答ー井戸のつるべ（チンチョヌ、チルビン）

○おまえは向こうから回ってこい。私はここから回って行こう。出会ってから仲よく手を結ぼう。

（ラワワチコラティドゥテイワ、イチユ、ナユシ ヌーガ）答ー芭蕉ばしやう（バシヤ）

○天は傘になつて、下はひげだらけの物は何だろうか。

（ティンガサ、コウーヒジ、ヌーガ）答ー田芋または里芋

○野原の赤い卵は何の卵だろうか。

（ハルヌ アーフガ、ヌーガ）答ー蘇鉄の実

○畑の豚の飼料は何だろうか。

（ハルヌ、トオーニ、ヌーガ）答ーねずみのくい残しの、唐芋や砂糖きび。

○畑の赤いチンチンは何だろう。

（ハツテヌ、アフグイ、ヌーガ）答ーにんじん

○畑のハンドガメ（水など入れるための名）は何だろう。

（ハルヌ、ハンドガミ、ヌーガ）答ーひばりの巢（チツチヌシー）

○むいてもむいても実のでてこないものは何だろう。

（ムチム、ムチム、ミーヌ、イジラシ、ヌーガ）答ーらつきょう（ダツチヨ）

○初め四つ、次は二つ、最後は三つで歩くものは何だ

ろう。

(ハジメユウチ、ウンカラターチ、イチバンアトウワ、ミーチシアチュシ、ヌーガ) 答―人間(乳児・大人・老人を指す)

○野原のきれいな娘さんはだれだろう。

(ハルヌ、チュラメラビ、ヌーガ) 答―蘇鉄の実・ヤナブ赤い着物をつけてきれい。

○畑に行くときは、腹はすつかりへこんで、帰るときには腹いっぱいになるものは何だろう。

(ハルチ、イチユニワ、ワタヒーチカテイ、ムドユニワ、ワタブタナイチュシ、ヌーガ) 答―草刈りぶくろ(クサハイオーダ) クサハイオーダはわら縄やしゆる縄で編んでつくつてある。

○天気の良い日も、雨の日風の日、年中傘をさしているものは何だろう。

(イチーム、ハササチタチュシ、ヌーガ) 答―田芋・里芋・くわす芋の葉。

○下にはきれいな着物を着て、上には古ぼけた着物を着て立っているものは何だろう。

(シャーニワ、チュラチバラキチ、ウイニワ、ウツサギ

チバラキチ、タチウーシ、ヌーガ) 答―芭蕉

○畑の洗面器は何だろう。

(ハルヌ、ビンダレ、ヌーガ) 答―キャベツの葉(タマナヌフア)

○天をさしているのが二本、地面をさしているのが四本、後ろに庭ぼうきをひっさげたのは何だろう。

(ティンサシタサシ、ジーサシユサシ、ウシユニ、ミヤーポーチ、フィキトウシ、ヌーガ) 答―牛

○立てば低く、座れば高くなるところはどこだろう。

(タテワヒクサ、イーワタカサ、ナユヌトウクルワ、ウダカヤ) 答―家の天井

○上はため池、下は火がぼうぼう燃えているのは何だろう。

(ウイワ、タミチ、シャーワ、マチヌ、ボウボウメートウシ、ヌーガ) 答―ふる

○角々長々盛り盛りは何だろう。

(シカクニ、ナガナガ、ムイムイ、ユタユタ) 答―お膳(せんでん)はし・盛りあげごはん・お汁。

○畑の俵は何だろう。

(ハツテヌ、キイチドウラ、ヌーガ) 答―らつかせい(ジ―

マーミ)

○畑の包丁は何だろう。

(ハツテヌ、ハタナ、ヌーガ) 答―かやの葉(ギヤヌフア)

○金山を通って、竹山を越えて金山で火事するものは何だろう。

(ハニヤマ、トゥテイ、デーヤマ、フィテイ、ハニヤマニテイ、クワージシュシ、ヌーガ) 答―きせる

○あなたは早く行って道の掃除をしない。私は虫を食ってくるから、というのは何だろう。

(ウラワ、ミチサブレシー、ヘーサイキ、ワヌワ、ムシトゥテイ、カデイチュントウ、デイウシ、ヌーガ) 答―くしとすきぐし(サバチトウクシ)

大東亜戦争のすぐ後まで女の子の頭には毛じらみが、たくさん卵を生みつけていて、たえずすきぐしですいてしらみを取ったものである。

○畑の巡査はだれだろう。

(ハルヌジュンサ、タルントウ) 答―さるかきみかん(サラチ)

○人をひっかける野原のきれいな娘はだれだろう。

(チューヒツケユヌ、ハルヌ、チュラアヤハ、タルントウ) 答―野いばら(ニジヌハナ)

○野原のふたのないかめは、何だろう。

(ハルヌ、フタナシガミ、ヌントウ) 答―ひばりの巢(ジツチヌシー)

○いつも同じ道を歩いているのは何だろう。

(イチーム、ユヌミチカラ、アチュシ、ヌントウ) 答―時計

○下はため池、中は火がともって、傘をさしているのは、何だろう。

(シャーワ、タミチ、ナーワ、マツチヌトウブリテイ、ウイニ、ハサハブトウシ、ヌーガ) 答―ランプ

○口から食べて、おなかから出すものは何だろう。

(クチカラカデイ、ワタカライヂヤシュシ、ヌーガ) 答―糞すり臼(シルシ)

○追いつこう、追いつこうとしても、追いつけないものは何だろう。

(ウイチチム、ウイチチム、ウイチカラシ、ヌーガ) 答―自分のかげ(ドウヌ、ハガ)

○三人で一本のかんざしをさしているものは何だ

う。

(ミチャイシ、テイチヌ、トングシ、サチウーシ、ヌーガ) 答―砂糖きびの汁しぼり車(サタグルマ)

○野原の走り馬はだれだろう。

(ハルヌハイマー、タルンートウ) 答―ねずみ。野原で馬のように走るものは、ねずみよりほかにない。

(二) 子供と遊び

1 童謡や呼びかけを伴う遊び

(1) イチヌケージ(二の系図)

一ぬ系図、二系図、三ぬ系図、四系図、しいくぬま―くぬ、茶とうぐわぬゆえに、芋ぬ葉むかあしやぬ葉むとうる混じでんでんぐうる万三代ぬ、しい。

(一の系図も…四の系図も、四方八方の祖先の祭祀を営むので、芋の葉や芭蕉の新芽を混ぜて精進料理の和物を作るから、子々孫々全部が車座になって座り、三万代の後までも祖先の霊を吊ってくれよ。)

技法

両足を投げ出して円陣に座り、中央に一人の鬼が正座

して、右人指し指で右の文句を唱えつつ各足を点呼して行き、最後の「しい」に当たった人は片足を引つ込める。これを繰り返して最初に両足とも引つ込めた人が鬼に代わる。

(2) イチマシ

いちまし、なまし、くみやがぬみなど、八重さくら、あまなぎ、くまなぎ、鉄砲玉、十四が、しい。

技法

両手を握りしめ、一人が右の歌にふしをつけて唱えながら数え、十四がしいに当たった人が手を引つ込める。早く両手とも引つ込めた人が勝ちになる。

(3) サミ(じゃんけん)

一対一の個人またはグループで争うジャンケン的一种で、右手の人指し指、親指、小指を同時に出し合って勝負を決めるが、勝ったときは「しいだいよ」と叫びつつ左手の指を折って勝ち数を勘定して行く。両方ともアイコときは「ワイ」といつてやり直す。親指と人指し指は親指の勝ち、人指し指と小指は、人指し指の勝ち、親指と小指は小指の勝ちとなっている。

西村サキ氏はサミについてその著「沖永良部島」で

次のように述べている。

「昭和五十一年十月八日の夜のNHKテレビの「ほん」とにほんと」で、インドネシアの「ジャンケン」のやり方を見た。それが何と私の島と同じ方法であった。

インドネシアの子ども達は、「すうーい、すうーい」という掛声をかけたが、島ではその「ジャンケン」のことを「サミ」といい、同じく、親指、人さし指、小指の三種のどれかを出して相手方と勝負を決める。掛声は「しいーだいよ」と、さげびつつ左手の指を折りまげながら勘定していく。勝負はインドネシアの国と同じである。

この「サミ」は何かの競技をする場合に先行、後行を決める時にも行われるが、「サミ」の団体勝負をすることもある。この場合、二列横隊に同じ人数が向い合って、共に隊長を選び、その隊長の指図で後手まわして相手方に感ずかれないようによく吟味してから「しいーだいよ」と出し、もし両方とも同じ指であったら「ワイ又はナンドシー」として、又やり直す。そして勝数の多い方は、負けた方の手の甲を「パッシイ、パッシイ」とたたく。この勝負を繰り返して競技す

る。この「サミ」で子どもころは、よく遊んだものである。

この三種の指がそれぞれに何の意味をなしているか全く知らなかったが、あの番組ではじめて知った。

この三種の指は、このような意味あいのもので、アウンサーの説明によると、

象である親指は、人間である人さし指に勝ち、人間である人さし指は、蟻である小指に勝ち、蟻である小指は、象に勝つとのきまりである。

このような遊びなども何か共通のものがあり、文化交流がある時代に、黒潮に乗って来たものであろう。」

(4) ガフシヌクワ(鳥の子)

南(へ)ち行こうか、北(ニシ)ち行こうか、一ち後ぬ、ちゅら子、とつてゐーり。

(南に行こうか、北に行こうか、いちばんしんがりの美しい子を取りなさい。あなたにあげましょう。)

技法

団体遊戯で、二組で向かい合って一列縦隊に並び、前の人の帯を両手でにぎって連なり、互いに先頭同士が向き合って、右の歌を唱え終わると同時に敏捷に相手の

列の最後尾めがけて殺到し、帯を離さずに相手のしんがりの者を捕らえた方が勝ち。

(5) **クントヌシヨ（くへり門）**

くんとぬじよから、めんちきしより。

（冠木門からお入りください）

技法

互いに向き合って二列横隊となり、隣同士と手を握り合う。先頭の二人から同時に左手を放して自分の右手の輪の下を潜り抜けて列の後尾に駆けつけ、また両手を握り合って並ぶ。このようにして早く潜り抜けた組が勝。

(6) **ヨイサークミヤガリ**

二人ずつ向き合い両手をつないでたくさん並び、一人がその上を「ヨイサークミヤガリ」という掛け声とともに、持ち上げられて次々と渡って行く。自分の手の上を渡ってしまうと、また列の端へ駆けつけて向かい同士手を組み合い、渡って来る人を待つ。はやく渡り終わった組が勝ち。

(7) **ハクリシヨ（かくれんぼ）**

ジャンケン（サミ）をして負けた人が鬼になり皆思いつき合図をかくれ、「チュイ」という合図をした

とき、目をつぶっていた鬼は目をあけて捜し始める。（チュイ）とはかくれ終わったという合図である。

(8) **円の中の坊々さん**

円の中の坊々さん、何でそんなに泣いている。親の耳を食って、立って見よ。座って見よ。お前の後ろはだれさんか。

円の中央に坊さん（鬼）が両手で顔を覆って座る。外の者は手をつないで円をつくり、そのまわりを右の歌を歌いながら回る。

（あなたの後ろはだれさんか）というところをつないだ手をといて止まる。そのとき坊さん（鬼）は目をあけて立ちあがり、次の歌を歌いながら一人一人数えて最後に当たった人が坊さんになり、前のことを繰り返しながら遊ぶ。

坊さんが人を数えるときに歌う歌

「二人二人三名の子、よつたかかって、かすづかみ、後はだれがささえるか、あの人さん、この人さん」

(9) **ひーらいた**

ひーらいた、ひーらいた。何の花がひーらいた。れんげの花がひーらいた。ひーらいたとおもえば、いーつ

まーにかつーぼんだ。つぼんだつぼんだ、何の花がつぼんだ。れんげの花がつぼんだ。つぼんだと思えばいつのまにか開いた。

手をつないで円陣をつくり、歌詞にしたがって円を大きく開いたり、小さくつぼめたりして遊ぶ。

(10) **ヒナコアシビ（尻の占いあそび）**

円を作って並び、一人が円の中で「ひなこ、ひなこ、たーが、ひわひつたか、ひいた人は、みしたちみしけ。」と唱えながら数え、みしけのけに当たった人が、おならを出したことになる遊び。（ひとはおならの意）

(11) **カライムニータ（唐辛煮えた）**

（唐辛煮いた。芋しる、しゃーり。）
（唐辛つまり甘藷が煮えたから、芋の汁を切ってください）

二組に分かれて交互に鬼になるが、一方は大人の着物の下に味方の数人を覆い隠し、準備ができたら右の歌を歌い、相手方に着物の下に隠れている子供の人数を言い当てさせる遊び。

(12) **ハジギヌミ（木の上の鬼）**

「はじぎぬみーぬ、鬼とらが七ち八ちちぬみいて、う

んが、うとうぬ、たきが、あぶらくーで、キーキー。」
（はじ木のしげみの中で、鬼たちが七本八本角が生えて、その妹の「たき」が油食ってキーキー）

木に登っている鬼ごっこで、右の歌を歌って鬼をからかいながら、屋敷の防風林の枝から枝へと逃げまわる。

「はじぎ」は 和名（はまごう）の木

(13) **ヤマトぬ、チャーチャ（大和の爺々）**

夏野菜などにつく羽虫で、羽根の色が赤・黄・緑・紫などに美しく輝くものを、ぬき足さし足で捕らえ、「大和ぬ爺々、ワ（私）め、菓子と雪駄サバ（草履）、ユビガニ（指輪）買ってきちたばり」と、願望をこめた文句を唱えつつ放ち飛ばし、だれの虫が高く遠く飛んだかを競う。

(14) **カンクマンチ（螢招き）**

（かんこ、かんこ、わやぬじようち、めんしより。あさばに、ゆうばにしてい、待つちよい、待つちよい。）
梅雨あがりの夕やみを点々と、ぬい連ねて飛び交う螢を、門前に出て竹の小枝などでさし招く歌。

螢よ螢よ、私の門前にきてくれよ。朝飯、夕飯盛り並べて、朝から待ちうけているから、今夜はきてくれよ。

(15) イシヤトウアマシド(かまきり遊び)

「いしやと、しやーとう、まーいしやと、豆ぬならばど、かましゆんど。」

かまきりを捕らえて、ガジユマルの小枝で遊ばせながら歌う歌である。

「かまきりよ、かまきりよ、かまをふりふり小枝で遊べよ。やがて秋風が吹き初めて豆が新しく取れたとき、うんと食べさせてやるよ。それまでは、かまをふりふり待ってくれよ。」

(16) アンゲワ(牟虫)

「土の中で唐芋の皮をむしり食べる虫」色は白くぶよぶよに太って、はだは軟らか、指でつまみとれば首をしきりに振りまわす。

(あんぐわ、あんぐわ、唐(支那)うだんと、大和(本土)うだんと)と称える。あんぐわ||花嫁の意

あんぐわが色白で、はだざわりも軟らかく、ぶよぶよ太っているが、いかにも鈍感らしく見受けられるので、からかつての質問と思われる。

(17) タークナジャ(とかげ)

「いしぬ穴ぬ、たーくなじや、うだちめんが、たーく

なじや、上城(ニシミ)ぬ島ち、嫁(トウジ)むれが。」

とかげはその色彩が美しいので、男性の盛装に見立てての歌。ニシミは島内随一の美人の多い所という。石垣の穴住まいのとかげよ、今日は着飾ってどこに出かけるのか、きつとニシミの郷に美しい嫁探しに行くのどう。

(18) クツカル(深山しようびん)

「くつかるかーる。ちゅらさわあーしが、うとげぬ長さぬ、ユイユイ。」

深山しようびんは梅雨前に、南国から渡ってきてきて梅雨を呼びよせるように朝夕鳴くので、それを聞きながら、子供たちは右の歌を歌う。はなやかな紅色の口ばし、濃い赤色のつやつやした羽、目のまわりにルリ色のような飾り、とても美しいが、玉にきずは、オトガイの長いことだよ。と小鳥の代わりになげている歌。

(19) アガリヌ、チャムドイ(東のちやぼ)

「アガリヌ、ちやむどいぬ、羽根打ちくくてん、くくてん。」

東隣の家の観賞用のチャボのかわいらしい羽ばたきと、そのすみきった鳴き声を表現し、ちやぼによびかけた歌。

(20) ヨームヌカンカン

「よーむぬ、かんかん、高木ち登(ヌ)ったい、低木ちぬったい、きーしく、かーしく。」

よーむ(知名町の屋字母)、かん(人名で木登りの名人)、高い木といわず、低い木といわず、まったく枝から枝へと飛びまわる軽快な姿の表現。

(21) トートウファイ

(童祝詞—童イグト)

(トウトウファイ(お月様)、わぬ、ふでいらちたばーり。)

お月様に両手を合わせて、自己の生育を祈る言葉。

(22) 牛のケーベナリ

「牛ぬケーベ(ほどこ)なり、天空(テント)ぬケーベ(ほどこ)なり。」

青みかん、九年母(くねんぼ)、もも、ばんじろなどをちぎるとき

(23) ウニヌ、フウイユウ、クウテイハンマー

(フウイユウ—大魚)

「墓やおそれられている所を指してはいけないという習慣があるのに、無意識に墓をさして示したときに、罪

ほろぼしに、その指を上下の前歯でかんで唱える。海の大魚もはんま(飯米)すなわちこはんもお供えしますから、不敬を許してくれ。

(24) チークレバ(乳歯のぬけたとき)

「ゆむぬ(ねずみ)ぬ歯と、わー歯と、ミーベーク(生えくらべ)」

右の言葉を唱えながら、上あご歯は床下に投げ込み、下あご歯は展根上に投げる。

(25) アミワ、フンナ

雨天が続いて、うつつとうしく、外に出て遊びたい願いで、天気になって欲しいとき、

「雨は降んな、降んな、テイダ(太陽)は照り照り」

(26) グブグブ チョウチンナンナ

「グブ(瘤)グブ、チョウチンナンナ、フデルクナーンナ、ヒヤーサ ナテイタボーリ。」

何かにぶつかって、頭や額などを打ちつけ瘤が出たりしたとき、そこを平手でなで、こすりながら唱えるときの言葉。

(27) ナマ、ナチュタヌ、チュウヌ、ミー

「なま(いま)泣ちゆたぬ、ちゆ(人)ぬ目は、たー

みー(目)が、でーくにばつてぬ、ちつぱがみ。」
 (どういうときに唱えるか意不詳)

2 植物を使う遊び

(1) デー(竹)を使う遊び

① ハニタイキユウ

竹の枝を二十本ぐらい集めて十三センチメートルほどに切りそろえる。左手でこれを立てて持ち、右手に一本を持って左手の一本をおさえ、左手を開くと他のものが散らばる。その中から他のものを動かさないように、右手の一本ではねあげて取っていく遊び。

② シルハニ(水鉄砲)

節の長い竹を一方に節をつけて切りとり、節の方の中央に小さい穴をあけ、あいている方に細い竹をさし込み、先端に布切れを巻きつけ、それを前の竹の中に入れ、水の中で布切れに水を十分吸わせてから小穴のあいている方に向け強く押し、水をはね飛ばして遊ぶ。

③ ヒヤラー(紙鉄砲)

水鉄砲ぐらいの長さの竹の両方あけたものに、同じ太さの竹に細い竹をさし込み、両方あいた方にさん(樹イ

ニシ木)の実をつめてそれを弾にして、遠くに飛ばして遊ぶ。さん(樹)の実のないときは、紙をかんだり、手でまるめてから使う。

④ アサトウイ(蟬とり)

一本の竹の先を丸くまげ輪にして、そのつけ根を糸で結び、それにくもの巣をまんべんなくからませ、それで木に止まっている蟬を押さえて捕る。

⑤ デーヒユウヒユウ(竹笛)

竹で笛を作って、吹き鳴らして楽しむ。

⑥ ワーモーシ(輪回し)(図3)

五十センチメートルぐらいの竹の一方を十五センチメートルぐらい割り、それに小竹をはさんで輪回しグシをつくり、それで輪を回して遊ぶ。

⑦ 竹とんぼ

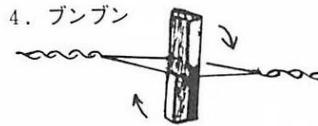
大きな竹を割り、長さ十五センチメートル、幅一〜一・五センチメートルのプロペラ状のものをつくる。その真ん中にきりで穴をあけ、軸をつけてトンボ状にする。両てのひらの間にその軸をはさんで回して飛ばす。

⑧ プンブン(図4)

竹とんぼの羽根のように薄板の中央に穴を二つあけ、



3. 輪まわし

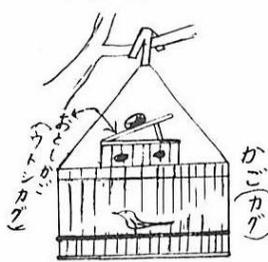


4. プンブン

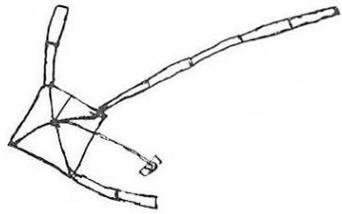


5. アシガル(竹馬)

6. ファートウカグ(鳥かご)



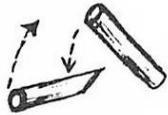
7. プンブンダク(たこ)



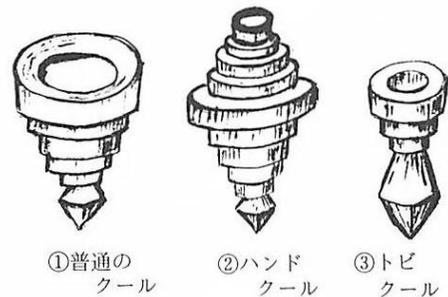
8. デーマアアシビ(竹馬あそび)



9. ギチョウ



10. クール(こま)



①普通のクール

②ハンドクール

③トビクール

これに通した糸をよじらせた後、強く引っばると、羽根がブンブン音を出して回る。

⑨ アシガル(竹馬) (図5)

六尺ほどの竹棒に、小竹を結びつけて足場をつくり、右、左の足をのせて歩く男の子の遊び。

⑩ ファートカグ(鳥かご) (図6)

竹を細く削って、かごを作りそれに小鳥を飼育する。飼いかごの上に二段かご。小鳥を捕まえるおとしのついたかごを重ね、飼いかごで飛回って遊んでいる小鳥を、おとりにして、新鳥をおびきよせて捕まえるかご。

⑪ ブンターク(たこ) (図7)

正方形の紙の裏面に、薄くそいだ竹を十文字にのりではりつけ、長い尾と、両側の竹の延長に耳をつけ十文字のところに糸をつけ、空高くあげて喜んだ。

⑫ 弓と矢

弾力のある竹を曲げ、その両端を紐で結んで弓をつくり、矢を飛ばして遊ぶ。

⑬ デーマアアシビ(竹馬遊び) (図8)

男の子が六尺ほどの竹棒にまたがり「ハイドードー」「ハイドードー」といいながら、走って喜んだ遊び。

(2) ヒー(木)を使うもの

① ギチヨウ (図9)

一本の丸木の端を斜めに切り、もう一本の丸太を手にとって、斜めになっている方を上から強く打つと飛び上がる。それを丸太でたいて遠くへ飛ばし、その距離を丸太ではかり、勝負できめる。

② クール(こま) (図10)

クルボーギ(クロ木)は木質部が堅くて白い木で独楽を作るのに適している。独楽の形は種々あるが代表的なものに、普通のクール、ハンドグール、トビグールなどがある。トビグールは竹に紐をつけ、その紐で独楽を巻いて地面に放ち、回っているところを紐でたいて長く回しくらべをする。

なぎグールは、円形に切った直径六センチメートルぐらいの独楽を作り、紐で巻いて投げて強く回転させて遊ぶ。

③ デヤボール (図11)

独楽は直径五〜六センチメートル、長さ十三センチメートルぐらいのクルボー木の中を細くして作る。回し紐は長さ五十センチメートルほどの竹棒二本を百五十

センチメートルぐらいのソー糸で結んで作る。

遊び方は、糸の上に独楽をのせ、両手で回してから、高くあげて受け止め、またあげて受け止めて遊ぶ。

④ ヒニ(舟)

板ぎれで舟形を作り、その上に板で船長部屋、煙突など作り、木の葉を帆に仕立てて池に浮かべ、風の力で池の面を走らせた。

⑤ ハジギヌ、ハタナ(はまぼうの剣)

はまぼうの長く出たための若枝を取り、皮をするつとはくと、白い木質がでる。それを剣とし、はいだ皮をさやにし、剣をさやに納めて、相手と向かい合い勝負をする。はまぼうは弾力があってしなやかなので、相手にけがをさせることはない。

(3) 蘇鉄を使うもの

① 蘇鉄葉の首飾り (図12 首飾りの基礎作り)

蘇鉄の葉の葉針を一つずつはずし、先端の針を付け根の葉肉に刺して輪を作り、それをつなぎあわせて首飾りにする。

② 蘇鉄の葉の眼鏡 (図13)

蘇鉄の葉の首飾りの輪二つを、小さな輪で結び、眼鏡

を作った。

③ 蘇鉄葉の飛行機

蘇鉄から葉を一本折り、図のとおり作製して人指し指を後ろにあて、親指と中指・薬指ではさみ、肩の上で水平にして力を入れて放すと、風を切つて飛んで行った。子供たちは、めいめい作り飛ぶ距離を競った。

④ 花かご (図15)

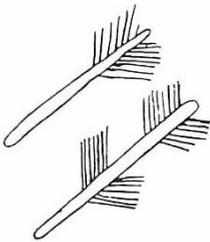
蘇鉄の葉の葉針を組み合わせてかごを作り、野原のかわいい花や、いちごなどを入れて楽しんだ。

⑤ 帽子

葉の付け根の茎と、葉末の方を結んで帽子に見立て、かぶって遊んだ。

⑥ ヒューヒュー (図16)

蘇鉄の実の赤皮を取り除き、堅い殻の上の端を切り取って中味をえぐり出し、中空になったものを笛にして鳴らす。

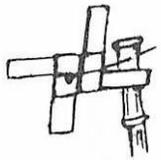


14. 蘇鉄の飛行機

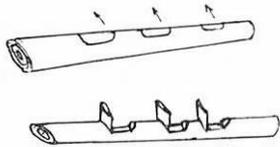
17. 実をけずって作ったヤナブ人形



19. カジモーヤ



20. バシャデッポウ
(芭蕉鉄砲)



22. ギーギーダマ
(ほおずき)



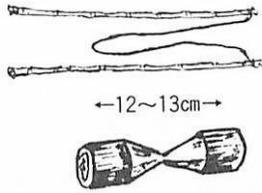
18. アダニヌラッパ



21. フクギヌサバ
(福木の草履)



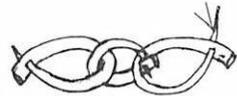
11. デイアボール



12. ストチヌクサイ
(蘇鉄のくさり)



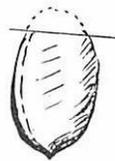
13. ミンカガニ



15. 蘇鉄の花かご



16. ストチヌ
ヒューヒュー
(蘇鉄の笛)



⑦ 人形 (図17)

蘇鉄の実の赤皮の一部を除いて白い部分に目鼻を描き、人形の頭を作った。

(4) アダン葉を使うもの

① ウビンガニ(指輪)

アダンの葉の両ふちと中央のとげを取り除いて、中央から二つにさき、指輪を作って、手にはめて遊ぶ。

② アダニヌラッパ (図18)

アダンの若葉をひきぬき、それを裏がえして五センチメートルぐらいに切り、それを弁にして⑩のようにした葉で、ムサの方から巻き、巻き終わりを竹ぐしなどで留め、ラッパのように吹き鳴らす。

③ カジモーシャ(かざぐるま) (図19)

⑩の整えた葉で風車を作り、その中央を竹の小枝で留め、少し太めの竹の筒に入れ、風に向かってクルクル回わして遊ぶ。

(5) 芭蕉を使うもの

① 葉で蟬とり

若い葉をくるくる巻いて、竹に結わえる。その口の方で木に止まっている蟬をつつき、巻いた葉の中に落ちて遊ぶ。

とる。

② ククマイ(花)

花のガクをはずして、ままごと遊びの茶わんや皿にし、中にあるしべは、ごちそうにする。

③ バシャデッポウ (図20)

芭蕉の葉を切って葉を全部取りはずし、小刀で茎に切れ目を入れて切った皮の部分を立てる。左手で茎を握り、右手で立てた茎皮を強く押し倒すと、そのたびに機関銃を発射したときのような音を立てる。

(6) その他

① 福木の葉のサバ(福木の葉の草履) (図21)

福木の葉が二枚対になった、十三センチメートルぐらいのを取り一方の葉の付け根の部分から、五分の一ほど残して折りとる。これを二つこしらえて草履にして履いて遊ぶ。

② 福木の葉の皿

ままごと遊びのお皿に厚みがあつて、丈夫な葉をお皿にしてままごと遊びをした。

③ ゆりの花びら

一ひらずつ、もんで口で空気を吹きいれ、ふくらませ

て遊ぶ。小さい子供には、竹のくだに結びつけてふくらませて遊ばせる。

④ **ギーギータマ(ほおずき)** (図22)

千なりほおずきの熟する直前に身をちぎり、中の種子を全部取り出し、口の中でギーギー音を立てて鳴らす遊び。

⑤ **ムツチ(樹液)**

ガジュマルの幹を傷つけて出る粘液や、未熟の小麦の乳液や、チーギの実の青いときの白い汁をそれぞれガムのようにかんで遊ぶ。

⑥ **首飾り(おしろい花、アークチ木のナイ、シンシ玉)**

・おしろい花を糸でつないで輪にし、首にはめて飾った。
・アークチ木(もくたちばな) アークチ木の実の青いのを、針で糸に通し輪にして首に飾る。

・シンシ玉(数珠玉) ねずみ色の光沢があつて堅く、首飾りとしては、最高のものであつた。

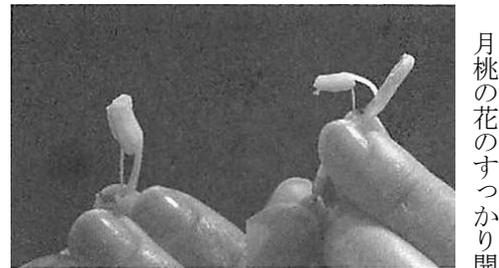
⑦ **ヒヤーラ玉(さんし樹の実)**

充実した実をヒヤーラー(空気銃)の弾として鳴らして遊ぶ。

⑧ **ハマクラのつめ染め**

ハマクラの花弁を摘み、シーミ(かたばみ)の葉をよせて軟らかくなるまで練り就寝前に指の上に乗せてマールウの葉で包んでおき、翌朝取り除くと、紅で染めたように美しく染まつている。その民謡に「ハマクラぬ花は、爪先にすみて、親のめえぬ事は肝に染みり」というのがある。(親のめえぬ事とは、親の言うこととはの意)

⑨ **サニヌハナまたはカンコヌハナ** (写真23)



23. サニヌハナ (カンコヌハナ)

(花粉のつく部分) から子房(ふくれた下部)に出ている筋を切らないようにして、子房とともにはずす。はずしたものの筋を下から引くと、人がおじきしているようになるので、「コッコバナ、プールキイリ」または「アマタ、コウビ、コウビ」(月桃の花おじきしなさい)と唱えながら、

おじきの動作をくりかえすようにして遊んだ。

プール(頭)、キイリ(下げなさい)は、共に子供言葉。

⑩ **月桃の花柄のちようちん**

花柄が柔軟なので、それを交互に両方に折りまげて、両方につながつたのを、手で持つてふりながら提灯ちようちん、提灯と、そのゆれるのを喜んだ。

⑪ **ハジヌクワ(つきいげの実)**

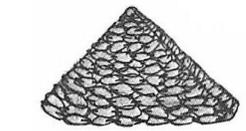
ハジヌクワ(つきいげの実)を浜辺から取ってきて一列に並べ、だれものが風で早く飛ぶかを競い合う遊び。



24. ハジヌクワ(つきいげの実)



⑫ **ハヤシグシ**



25. ガジュマルの葉の帽子

カヤの茎の長いのを枯らしてから、その先に十センチメートルほどの竹輪をはめて、ハヤシグシをつくる。ハヤシグシを右手に持つて走り、それを一回地面につけてから飛ばし、その距離を競う。危険だとのことで、大人からしかられる遊びであつた。

⑬ **ガジュマルの葉の帽子**

ガジュマルの黄色くなつて落ちた葉を拾い集め、葉柄で次々につなぎ合わせて三角帽を作り、かぶつて喜んだ。

⑭ **チョウチンバナ(セイロンベンケイの花)**

畑の土手に咲くセイロンベンケイの花を集めて、ふり鳴らしてその音を楽しんだ。

⑮ **クサオーシ**

・朝鮮芝の花茎を取り、茎の付け根に向かって汁をしぼり出し、玉になつた液を一人からませて、取り合う。
・すみれ(スモウトリバナ) すみれの花の後につきでたのをからませて、勝負して遊ぶ。

3 **石や貝を使う遊び**

(1) **イットワガヨ(おはじき)**

浜辺に打ちあげられた砂利の中からシビ(子安貝)の殻を拾い集めて「おはじき」にする。硝子玉がらすのものより美しいが、もっと艶つやのよいものを作るには、生きた貝を取つて来て土に埋めておくと貝の中実が腐り果て、殻の色艶がきれいになる。それをおはじきにする。

(2) イシ、ウスイクウ(石かくしくら)

二人以上で円を線引きし、各自の持っている小石を確かめあっておき、円内に埋めておいて、相手に探しあてさせる遊びである。

(3) ウッチャギー(打ち上げ石)

手ごろの小石を集め、二人以上の人が石一個ずつを元石として各自持ち、元石を振り上げて石をつかみ、最後に残った二つ以上の石をフガ(卵)として、自分のものにする。何度か繰り返して、最後に卵の多かった者が勝ちとなる。



26. 国とり

(4) 国とり(写真26)

大きめの円をいくつかに区切って小さな国をたくさん作り、国とり石(平たい石や、陶器のかげら)を持ち、自分の国をもとにして、次々小さな国を攻め、国とり石をはじき入れて自分の領分を広めて行く。小さな国がなくなったら、サーミ

(ジャンケン)をして、勝った方が相手の国境を自分の手で、自分の国に親指をつけて、半円を描いて自分の国を広めて、最後は相手を国なしにする遊び。

(5) キンバ

庭に下のような線を引き、二人以上の子供たちがめいめい平たい石を持ち、ジャンケンの順に従って、まず一年に石を投げ入れてから、片足で二年、三年と進み、大学まで行ってから引き返し、手で石をとって出発点に帰る。以下二年、三年へと石を入れ同様な動作を繰り返して、早く大学まで終えたものが勝ち。

大学校	
6年	5年
4年	
3年	
2年	
1年	

石の入っている学年はふまずに、飛びこさなければならぬという規則があった。円を使って、学年を切ってやったこともある。

(6) ウジ、オシー(牛つきあわせ)

夜光貝の殻に穴をあけて縄を通したものを闘牛に見立て、二人でこれを絡ませて遊ぶ。夜光貝はどっしりしていて都合がよい。他にも、くも貝、すいじ貝の殻、穴のあいた石などに縄を通して、闘牛ごっこをして遊んだ。

(7) チンタイ、オーシ(蝸牛あわせ)

蝸牛の殻を集め、その巻いた頂点をお互いに、押しあつて、相手の殻をやぶった方が勝ち。

(8) オヒトツ(お手玉遊び)

布で直径五センチメートルぐらいの円筒形の袋をつくり、その中に小石や荒めの砂を七分目程度入れてどじ、お手玉を五個作る。五個とも大きさを重さがそろっている方が扱いやすい。遊び方には座っている遊びと、立っている遊びがある。

① 座ってする遊び

一個を元として高く投げ上げ、元が落ちてくるまでに右手で四個を寄せ集めその上にこれを受ける。
次の歌を歌いながら、次々動作を変える。
※座りお手玉歌(牛、オイトツウタ)

ア、おーっ

- (一) おーっ落としておーさーら
- (二) お二つおとして、落としておーさーら
- (三) おつかみ、おつかみ、おーさーら
- (四) お手さみ、お手さみ、おーさーら

イ、いーつもたんたん

いーつもたんたん、たけみつ、明日はれんげの花開き、とつても来い、とつても来い、遠うのお山にききょうのお花が咲いたか開いたか、わたしーら、ぬーがいな、へんどこどつこい、やれこれしや、おのせ、おきり、おば

- (五) おつりんご、おつりんご、おーさーら
- (六) おんばさみ、おんばさみ、おーさーら
- (七) おおそれ、おおそれ、手がけておとして、おーさーら
- (八) おてもたけ、おてもたけ、おてもたけしよう、おーさーら
- (九) おてんぶーし、おてんぶーし、おーさーら
- (十) ひるひる、ひるひる、おーさーら
- (十一) ちーはすこぐれ、こぐれ、こぐった、おーさーら
- (十二) どの玉くれやんせ、どの玉くれやんせ、おーさーら
- (十三) お一つやのむつるげ、お一つやのむつるげおーさーら

(十四) お左り、お左り、おーさーら

(十五) やーつめ、やーつめ、やつめ、おーさーら

(十六) お橋くぐれ、くぐれ、こぐうった、おーさーら

ら、一貫しよ。

注 この「いーつもたんたん」は、明治二十四年十月生まれの町田ヨネさん（手々知名）が小学三年時代、そのころの農業教師の娘、永野ケサさん（同級生）が教えてくれたのだという。

② 立つて遊ぶ

- (一) 右手でお手玉二つを持ち、交互に上にあげて遊ぶ。一方を落としたら負け。
- (二) (一)のようにしながら、左手にも一個持ち、動いている右手に投げ入れて調子を合わせて上手に扱う。
- (三) (一)のようにしながら左手に二個持ち、その二個を右手の方の動いているのに投げ入れて、上手に扱う。
- (四) (一)のようにしながら、上から落ちてくる一個を右手の甲にのせて、てのひらにのせ、その所作を上にあげたのが落ちてくるまで、その回数を多くするのが勝ちである。

(9) イシナギク、またはフーナギク(石投げく)

きまった場所から、石を投げて、だれのもが遠くまで飛んだかを競う遊び。場所は広っぱでしたり、またたぬ池や海などで、投げた距離のはつきりわかる所で行った。

た。

(10) チュンン、タラン(石飛ばしく)

薄くて丸い小石を、水面と平行に投げ、その石が沈むまでの間に何回水面に表れたかを競う遊び。

この遊びは、ため池や海で行った。このときのフー(投げる小石)は平たく薄いものがよく、投げ方も水面に平行に力強く投げるのが要領である。その数を数えるときには、チュン、タブン、ミブンと数えた。ブンとは石の水に落ちる音のブンからきたものだろうか。大抵男の子の遊びでしたが、男の子に混じってやる気丈な女の子もいた。

4 その他の遊び

(1) ウニシュ(鬼じり)

サーミ(じゃんけん)で負けた人が鬼になり、一人捕まえたなら、捕まえられた人が鬼になり、同じことを繰り返していく。

(2) トリコ(陣屋遊び)

戦場をはさんで両方に陣屋の線を引く、同数ずつ両方に分かれて、陣屋から出て、相手方を捕まえ合う。その場合、陣屋を早く出た者ほど弱く、陣屋を後から出た者

ほど強いという規則がある。捕まえられた者は相手方の陣屋につながれ、手を延べて味方の救出を待つ。全員トリコになった方が負け。

(3) ナーミヌヤー(砂遊び)

波打ち際に砂を高く盛り上げてその上にのぼり、少々高い波がきて砂が崩されていくときのスリルを楽しむ。このほか砂トンネルを掘ったり、塔を作ったりして遊ぶ。

(4) カニシンジク(堪忍くらべ)

柔道のような格闘競技で、下に押さえ込まれて辛抱できなくなった者は、上の者に合図を送って降参し起こしてもらった。

(5) マイヒーク(けり馬)

三人以上の遊びで、一人は立って馬の首になり、次の人は前の人の胸を抱き、一頭の馬をつくる。他の人は馬にけられないように馬に乗ると勝ちになる。けられたら負けで、次は馬のけり手になる。

(6) ハジオシ(足相撲)

両方向かい合ってあぐらをかいて座り、片足を立て、ふくらはぎをからめ、押し合って勝負をきめる。

(7) アタマイ(頭切り)
数人で入り交じり、かけ回りながら、相手の頭に手をふれ、その数の多い方が一番勝ちになる。運動量が非常に大きい。

(8) ダングラオウシ(騎馬戦)

鞍くらの作り方にはいろいろあって、一人で肩車に乗せたり、二人で手を井型に組み合わせたり、三人で馬を作って乗せたりする。

(9) ビー玉

三人か四人で遊ぶ遊びである。地面に天国の穴、地獄の穴、それに三・四・五の穴と計五つの穴を掘り、天国から地獄に向かって玉を投げ、地獄から勝ち進んで天国まで行き、次に地獄までもどり、うまくはいるとその人は刑事またはババになる。

(10) ベッタン

「べったん」または「めんこ」ともいう。

直径五センチメートルぐらいの丸い厚紙に絵が描かれていて、一つ十円ぐらいで店から買った。最初床にめんこを一つおき、一人が床のめんこに向かって、めんこをたたきつけ風圧で相手のめんこを、ひっくり返す。

(11) トーマイ(唐毬)

唐毬は正月を迎える師走の最も忙しい時期に、農家の母が夜なべをして作る。女兒への愛情を込めた最大のプレゼントでした。

大正初年ごろから本土のゴム毬がはいった。軽くて力を入れないでもポンポン上がる不思議さ、すべての女兒がその魅力にとりつかれ、またたく間に全島に広がった。唐毬はすっかり影をひそめた。

昭和四十四年沖永良部の空港開きを記念して、中央公民館で婦人会が中心となり、沖かね先生のご指導で復元の運びとなった。子供の遊ぶ玩具だった唐毬が民芸品として、登場するようになった。

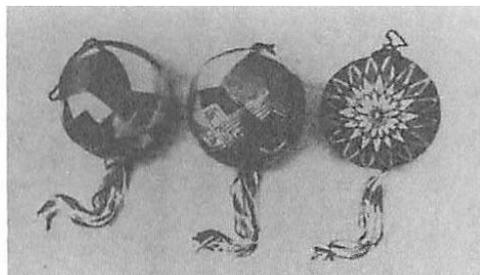
沖永良部の毬の由来についてはつまびらかでないが、唐毬の呼称のとおり、中国から琉球を経て伝来したものである。昔は蘇鉄の針の間にある綿のような黄褐色のもの(アクミ)を集め、芭蕉糸で男手を借りて強くしめてまるめた。(まりをつくときに高くあがるため)

現在の土産品はほとんど発泡スチロールを使用し、中央には、厚紙で囲いその中に三、四個くらいの小石か大豆を入れ、音を立てるようにしたもの、また中央に蘇鉄

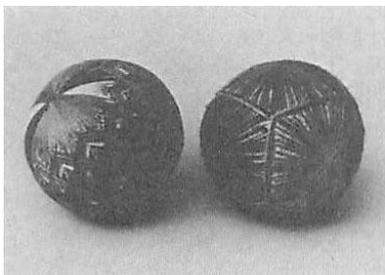
実の殻に小さい貝殻を入れてあって、振ると、カラカラと快い音がするものを入れ、飾りとして房をつける。毬の表面を彩る模様(柄)は、基本的には他地方のそれと大差はないが、赤・緑・黄・紫の四色の糸を種々に交錯させて、寸分の地肌も露出させない豪華絢爛なムードをかもし出している。このようにふんだんに原色を配した南方系の色彩は伝来も極めて古いのであろうと思われる。

昭和四十三年に島の空港が開かれて以来、観光客の土産品としての毛毬の需要は激増したが一個一個の手作りでは追いつかなくなった。唐毬のかがり糸は、昔は生糸を灰汁で煮たものに、黄色は、くちなしで、他の色は染料で染めて使った。観光土産品になってから、刺しゅう糸でかがっていたが、値段が高く、年寄りに細かいところが無理なので、現在は毛糸を使用したものが多い。

現在作られている毬の模様は、シチガラ(市松) (図28右) ススガワイ(裾変わり) (図28中) の二つを基本にしているが、昔はいろいろな柄のものが作られ、濛い中間色も用いられていた。



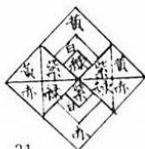
27. 唐毬(各直径9cm) 左シチガラ(市松) 中ススガワイ(裾変わり) 右新作



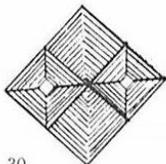
28. 唐毬左ススガワイ 右モールガチ



32. アジバナ(唐毬の上と下の面の刺しゅうの仕方)



31. シチガラ模様(市松)



30. ススガワイ模様(裾vari)



29. 唐毬のモールガチチ(モールは「まわり」の意ガチチは「うに」のこと)

* モールガチチ(回してある書舟) (28右・図29) 丸い毬の中に海のウニの刺のような糸が放射しているように刺したものをいう。

毬つき遊びには、キードウマイ(座り唐毬) とタチドウマイ(立ち唐毬) がある。座り唐毬は、円陣を作り座っていて手を左右交互に使って毬をつく。立ち唐毬は一人ずつくもので勝ち負けをきめた。その方法には、同じ方向にばかり体を巡らせながらつくチャームグイと、身体を動かさず左右交互に振り向いて右手のみでつく左ミグイ、右ミグイとがあった。

* 毬つき歌について

一 座り毬の歌

(一) とんと隣りのおなぐさらしは、顔がしゃくしてお目がすがめで、鼻がしし鼻、口がわれ口、お手がまん手で、衣しようが、べべいしよ、しりがですぎて、歩む姿は、ヒキドヒキド

(二) えんえん海ぬえんえん、砂ぬ細さぬ、ゆなばるばるたが、うんたがつくたぬ、とーるぬがらしは、ありちわーたい。うりちわーたい。いじゃぬむしるは、うらぐむ、わーぐむ、けーしゅんど、正月ユエに、

ういぐすく、はんじやなしが、乗いみせる馬やあや染、黒染、まつ黒はんじ。(ハンジは、たてがみの意)
(三) (チュウ) ち、一ちくぬ、二(ター) ち、たなばる、三(み) ち、みんざち、四(ユ) ち、ゆたかに、五(イチ) ち、いちさち、六(ム) ち、むんくず、七ち、ななざち、八ち、やまから、九(クヌ) ち、くだまち、十(トウ) は、いしごぬ上ぬ大根主が、みーびるとつて、むしかん、むしかん。

(四) 辻の門から、よいよい通りや、辻の女郎子が、茶むおいしり、煙草むおいしり、一昨年漬きたぬだちよぬ(漬物)、あげどうふ煮どうふおいしり(召し上がれ、召し上がれ)(辻は、辻遊かくのこと)

二 立ち唐摺の数え方と歌

(五) 一(チュツ) け、二(タツ) け、三つけ、四け、五け、六け、七け、八け、九け、十け。

十ずつを一かたまりとして数えるとき、一スチ、二スチ、三スチ、四スチ、五スチ、六スチ、七スチ、八スチ、九スチ、十スチ(百のこと)

(六) ちんちん 祝らしや

ちん、ちん 祝らしや、コート里之子、一皿ちき

どうてー、祝らしやしん候。吾が家が廻る。廻らち松千代主が、一祝に上城ぬ、按司加那志が乗御候ぬ馬や、綾染、黒染、真黒かんじや、筑登之棚場ぬ、ミユズミ、山原、国頭、渡嘉敷な、前ぬ、十条ぬ二鍋な持ちゆーさいぬ。

ニシタン隣ぬ、代役、段々代役、段々サーサ、ヤリサーサ、昨年や昨年や

二つ 祝らしや、三つ、ミンジク、四つ、豊かや、五つ一升炊き、六つ物くじゆ、七つ七幸、八つ山から、九つ管巻、十やウーチクタク、内クマぬ。

ヤシ主が、具志堅、具志堅、一つ太良、二つタラ三つタラ、四つタラ、五つタラ、六つタラ、七つタラ、八つタラ、九つタラ、十んタラ、稲当ナブルカチ、ウキ衆が、三升や牛買うたさ。ウツフルバイニカツルバイニ預きてい、三升や牛買うたさ。

(七) 梅と桜

一 二 三が 四が 五つ 六が 七 八が 七
や七やが綿染み、紺染み、かえてヒヤク、ハイハ
イ ハイ お呉れよ お呉れよ、なぜ飯食べる腹が痛、痛、サクシノモン、シシヤムンシヤ、ソノラン、そのとき、赤子ができた。その子は男の子なら寺男に預けて、寺の扉から突き落とされた。だれが落とした、お梅が落とした。お梅と桜と替えたならお梅はすぐ一等になれた。桜はよいとほめられた。

(12) 羽根つき

沖永良部は歴史的に琉球の支配下にあつたため、その文化はほとんど沖縄から北へ渡来したもので、本土の玩具は直接伝わってこなかったようである。従つて本土のような羽子板は古来なかつたが、明治十五年(一八八二年)生まれの古老の話では、幼いころ小さな竹筒に鶏の羽をさして羽根を作り、板で打つて遊んだが、うまくつけないので、羽根だけ根元を束ねて口で吹き上げ、手に受けるのを繰り返して遊んだとのことである。

(13) オージナギまたはオージナゲ(ぶらんこ) (図33)

七月の稲の取り入れが終わつた後、新しいわらで縄を

ない、その縄を三本組みにより合せて太い綱を作りそれを丈夫な木の枝にかけて、子供たちが交代で乗り、遠くへ、そして高くゆすり上げて、高く高く前後にゆれ動かしてスリルを楽しんだ。

(14) イーチャブ (図34)

暑い夏の盛りを、木の間を吹いてくる涼風と新しいわらの香りは、遠い幼い日の懐かしい思い出であるう。

(15) ヤゲラ

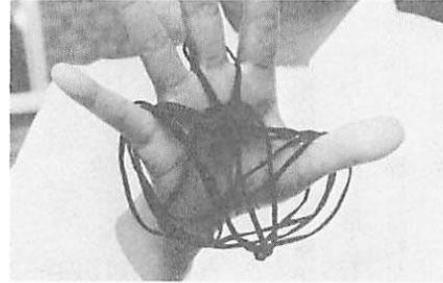
八月ころになつて家の中がむし暑くなると、子供たちはよく葉のおい茂つた木蔭を見つけて、そこに木片や板を集め縄で結わえて、わら蓆を敷き部屋らしく作った。高い所で得意になりながら、友達同士涼しい青葉のかけで宿題をした。

(16) アジトワイ(綾とり)

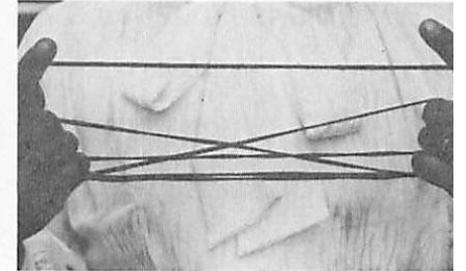
一本の糸を輪にしたものを両手の指十本で巧みにあやつつて、たくさんの造形の微妙さ、糸のおりなす芸術とでもいうのだろうか。



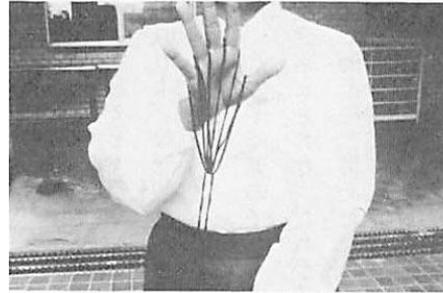
34. イーチャブ 33. オージナギ



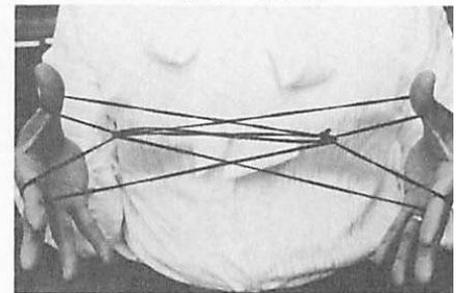
38. 綾とり (かぶと)



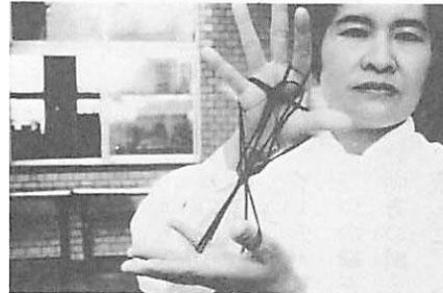
35. 綾とり (朝日)



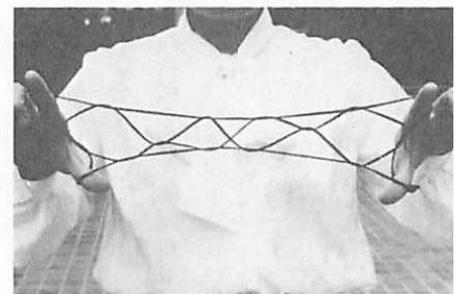
39. 綾とり (ほうぎ)



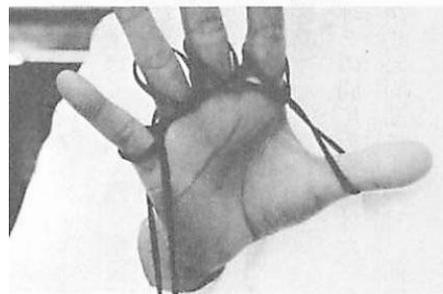
36. 綾とり (かえる)



40. 綾とり (一軒屋)



37. 綾とり (はしご)



41. 綾とり (手品)

◎ 綾の種類 () は出来上りの写真番号

朝日(35) かえる(36) はしご(37) かぶと(38) ほうぎ(39) 一軒屋(40) 手品(41)

(17) アンクタミ (karakuri-jirushi)

玩具のなかった明治時代、大正初期のころの幼児は自然の物でままごと遊びをした。お膳には芭蕉の葉、食器には浜で拾い集めた、色とりどり、形さまざまの美しい貝殻、芭蕉の花、ふくぎの葉、ごはんは白砂おかずは野草の花や葉を用いた。浜に打上げられた少し大型の巻貝や、泥をこねて作った人形をお客様に見立てて、作ったごちそうをあげ、ままごと遊びを楽しんだ。

(18) クワツクワ (人形)

女の子が布きれを集めて頭、胴体を作り、墨で顔を描いて、着物の残り布で着物を作ってもらい、それを着せたり、布団に見立てた中に寝かせたり、取り替えごっこをしたりして遊んだ。

(19) エーザトウイ (とんぼとり)

人指し指をくるくる回しながら、止まっているとんぼの目をくらまし、とんぼに近づいて捕まえる。

(20) チナウドイク (縄とび)

① 一人とび
② 集団とびのとき、縄に足をひっかけた人が、縄の回し手になる。

③ 一人とびしながら、集団とびの中を、とんでゆく方法などもあった。
④ 縄とびでかけっこ。

(21) ウデジマ (腕相撲)

両方互いに向かい合って、両方とも右腕のひじを畳につけ、右手を握り合い合図を待って力一杯相手の腕を畳にねじふせた方が勝ちになる。

(22) イラジマ (永良部相撲)

二人そんきよして、互いにまわしを取り合ってから立ち上がり、相手を倒してその背中を地面につけた者が勝ちになる。

(23) マーマーカイカイ (馬乗り遊び)

夜の一家団らんのとき、父親が四つんばいになり、幼児を一人や二人乗せる。子供たちは大喜びで、「マーマーカイカイ」と、唱えて、体をゆすぶって、とびあがりながら、手で馬のしりをたたいて部屋中乗りまわし

て親子で楽しむ遊び。

(24) スズリドーアシビ(すべり遊び)

稲を刈り取った後、たんぼの土手で、夕焼けの光を浴びながら、子供たちが集まって、すべって遊んだ。

(25) ウトウシムントメ(落とし物) 呪法じゆほう

柏常秋 著「沖永良部島民俗誌」による

落し物呪法

金銭その他重要品を紛失し、さがしても見あたらな
い時は、児童間では必ずチジュタンと称する呪法が行
なわれた。即ち左の掌に唾を吐き、これを右手の人指
し指でタンタンと叩きながら「落し物を見つけさせて
下さい。」という意味の唱え言を述べ、最後の文句に
至って、強く叩いた時に跳ねとんだしづくの方向に落
し物があるものと信じて、特にその場所をさがすので
あった。チジュというのは唾つばのこと。

この風習は、かつては鹿児島県のある地域にもあつ
て、ただ指の代りに拳を用いるだけの違いであつたよ
うである。

五 若者時代

1 母(明治九年生)から聞いた話

自分たちが若いころは、畑から帰って夕食をすます
と、若い娘たちが一つの家に数人集まって、すぐミー
ヌチンヂ(木綿糸つむぎ)や、フウウミ(芭蕉糸つむ
ぎ)をした。めいめいの物をつむぐこともあれば、ユ
イタバをすることもあった。

2 明治二十四年生まれの老婦人の話

私たちの若いころは、ミーヌハシ(木綿かせ)がヤ
マト(本土)から来るようになり、昔のようにフウ
ナビ(夜なべ)はしなかった。歌すきなメーラビ(娘)
は夕食をすませた後で、ニーセ(若者)の弾くサンシ
ル(三味線)に合わせて歌って遊んだものである。

3 国頭字の老婦人から聞いた話

国頭では、晩は若い男女が集まってフウーナビ(夜
なべ)をした。ニーセは縄ない、草履作りなどをし、
メーラビはナビトウイ(なべつかみ)ハシ(おげざ)
ナビシチ(なべおき)などをわらで作った。

これは、お互いにおしゃべりをしながらの作業なの
で大変楽しかった。

一 わたり作業が終わると、三味線が鳴りだす。歌が
とびだす。テンポの早い歌になると踊りもとびだしそ
の輪が広がる。これですっかり昼間の疲れもとれて、
後はしんみりしたイチカ節(池当節)でしめくくりに
なる。イチカ節の最後には必ず「さらば立ち別り、
明日の夜いもり、明日の夜いもり、誠語ら」と、みん
なで歌って名残りを惜しみ、明晩の楽しい集いをそれ
とはなしに約束して、三々五々連れ立って帰ったもの
である。

4 若者たちの集いの中で、時にはユングレ(いっしょ
の食事)をすることがあった。

米、鶏、野菜等をそれぞれ持ち寄り、メーラビたち
が腕をふるって、鶏入りのおいしい雑炊ができる。み
んなで大なべをかこみ、頭をよせあって、熱いのをふ
きふき、夕飯もとらずにすかしてきたおなか一杯食べ
る。思う存分食べた後は顔をふきふき、クワツチシャ
ーブタン(こちそうになりました。)といかにも満足け
だった。

これらは若者だけの特権みたいなもので、親たちの
若いころも同じようなことだったと親たちも認めてい
た。その他、字の共同作業、年中行事の中心になるの
は、いまでも昔も若者であることにかわりはなかった。

5 ニーセ、メーラビの遊び、共同作業はお互いを理解
し合う好機でもあった。そのころの結婚は、ウヤソウ
ジ(親同志の相談)できめられた。それで従兄妹の結
婚が多かった。資産家などでは、財産を他人にやるの
は惜しいといって近親結婚が多かった。

そんな関係で自分はこの人だと思っても、自由
にならないこともあったが、自分の理想とする相手と
親の理解を得て結ばれた好例もあった。

この遊びのほかに、牛馬の飼料として、草刈りが大
事な仕事の一つで、それには男女連れだつて行ったも
のである。これもニーセ、メーラビのお互いを理解し
合う機会を作る場でもあった。

「沖縄県史」の民俗編では、婚前交遊風習について、
「モウアシビ」として次のように述べている。

モウアシビ

モウアシビという若い男女の夜遊びは、明治・大正

の時代を通して盛んであった。モウというのは芝の生えた広場を意味する方言で、たいてい村里を離れたところが選ばれた。ドンチャン騒ぎをしても村人の安眠妨害にならないようにという若人たちの配慮からであつた。

モウアシビというのは、結婚の相手を選ぶ機会がたえられる男女の交際でもあつたので、適齢期の若者たちは年頃になると、みなそれに参加した。それに参加しないのは何か欠陥を持っているのではないかと、考えられがちだったので、若者の親たちも自分の息子や娘がモウアシビに行かないと、かえって心配したという。

モウアシビは月の晩によく見られる。夕食をすまし後片づけをおわつたミヤラビ（若い娘）やニセ（青年）たちは、それぞれ親しいドウシをさそいあつて、遊びの場所に連れ立って行つた。ニセの中には三味線をひっさげて行くのもいた。

遊びは九時・十時頃からはじまって夜中に及んだ。男女入り交つて円陣を作つて坐り、三味線にあわせて歌つたり踊つたりした。一人ずつ順次に踊らせたり、

男女打ち組で踊つたりした。モウアシビで歌われる歌、踊られる踊りは、いずれもテンポの早いものばかりで、それをモウアシビ歌ともいった。

いくつもの歌を連続的に歌いまくるカチャーシーというものがあるが、おそらく、これはモウアシビから発生したものであろう。

歌いつかれ踊りつかれて若者たちの散会するのは月が中天をすぎてから後である。モウアシビが散会する時には次の歌がたいい歌われた。

夜中天川や 島横になとん

今日や立別り 明日ん遊ば

モウアシビが散会になると、三々五々に帰路につくのであるが、そのうちの幾組かは想思の仲となつて、手をたずさえて姿を消してゆくのであつた。

○トウンガラヤー

宮古島の狩俣部落と池間島には、トウンガラヤーといふのが戦後まで残つていた。若者たちのトウンガラヤーとあつたので、若者宿、娘宿であるわけだ。この二つの宿は狩俣ムラと池間島にしか発達しなかつた。

女のトウンガラヤーでは、娘たちが夕食後、ここに集

まり、ウー（芋）つなぎなどをしながら雑談をした。

それがすんだら外のトウンガラヤーの娘たちと共に広場に出て、女だけのクイチャー踊りを踊つた。

池間では十時頃まで歌つたり踊つたりしてから、めいめいのトウンガラヤーに帰つて寝た。トウンガラヤーでも夜なべをやり、それがすむと広場でクイチャーを踊つたが、沖繩本島にあるようなモウアシビはやらなかつた。

女の貞操観念は、ひじょうに強いシマである。娘たちにトウンガラヤーをさせている親たちは、毎晩娘たちの部屋へ顔を出して世間話をしたが、それが一種の教育的な役割を果していたという。

久高島・糸満・慶良間の座間味などの地域では、モウアシビ風習がなく、結婚前の男女の交遊が罪悪視されてきた。したがって結婚相手の選択は親だけで決められていたのである。

以上、「沖繩県史」の民俗編の資料をかかげたが、同時代の沖永良部も似かよつていただろうことが察知できよう。